

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 手代木さづき

以下に、ハイデルベルク・ストラスブールでの「食」に関する三つのエピソードから、今回の派遣の重要なキーワードであった transculturality について学んだことを報告する。

ハイデルベルク初日の夕食の席で、「ギョーザの transculturality」が話題に上った。ちょうどその日の午前中、Heidelberg Centre for Transcultural Studies (HCTS) で、Oliver Lamers 研究管理長からピザを例に Transcultural Studies について伺ったところだった。ギョーザと言えば中華料理を想像しがちだが、小麦粉の皮でひき肉や野菜を包んで焼いたドイツ料理、マウルタッシェンをはじめ、似た食べ物は世界中にあるらしい。このことは、ヨーロッパにもギョーザがあるとは想像だにしていなかった私にとって驚きだった。しかし、それと同時に、世界中の似た料理をひとくくりに「ギョーザ」とまとめてしまう言い方は、とても東アジア的な表現であると感じた。マウルタッシェンの起源として、宗教的理由で肉を食べてはならない修道士が、どうしても肉を食べたくて、神の目を欺くために小麦粉の皮に包んで食べたという説があるそうだ。ギョーザ的な食べ物がどこで生まれ、どのように伝播したのか、或いは偶然形が似ているだけなのかは分からないが、もしそれが中国以外で発明され、中国へ伝わったものだったとしたら、それこそ transcultural な逆転の発想で面白そうだ。Transcultural studies と、関連する複数の文化をその内の一つの文化で代表させる見方は、分けて考えなければならぬと思った。

二つ目のエピソードは、ホテルで朝食をとりながらカム先生から聞いた話である。移民や難民の多いドイツで、排外主義者が、ナショナリズムを高揚させるために「ドイツ」の飲み物であるコーヒーを積極的に飲もうというキャンペーンが起こしたことがあるそうだ。確かに、コーヒーはドイツ人が好む飲み物ではある。しかし、原産地はアフリカであることを、その排外主義者は忘れていた。また、ドイツの食卓に欠かせないジャガイモも、元はと言えば大航海時代に南米からもたらされた食材だ。異文化圏由来のものが日常と密接な関係を持つことでその transcultural 性が見えにくくなり、ついには自文化アイデンティティの中核にもなりえるというダイナミズムを垣間見た、学問的な朝食の時間であった。

最後のエピソードは、ストラスブールの伝統料理についてである。ストラスブールのレストランは、シュークルート（塩漬けのキャベツを豚肉と煮込み、ジャガイモやソーセージと盛りつけた料理）やベッコフ（肉じゃがのような鍋料理）といった、ドイツ色の濃厚なアルザス料理を前面に押し出している印象があった。また、土産物店には、伝統衣装の子供たちとアルザス料理がともに描かれたポストカードや、地元の焼き菓子クグロフを焼くための陶器の型が多く並んでいた。このようなことから、ストラスブールでは、伝統料理が、アルザス独特のアイデンティティを示す重要なシンボルとして掲げられていると感じた。「食」の観光資源としての活用は、例えば大阪のたこ焼き・お好み焼きや仙台のずんだシェイク等、日本でも頻繁に行われている。しかし、第二次世界大戦後に至るまで独仏の複雑な紛争の舞台となり、今はフランス領であるアルザスが、ドイツ色の強い伝統料理を自身のイメージとして掲げることは、単なる観光戦略ではなく、他のフランス都市やドイツ都市とは異なる、transcultural かつ trans-border な独自のアイデンティティを示しているように感じた。

以上のようなエピソードを通して、身の回りにあふれる「食」に関する transculturality に気づくことができた。しかし、日常生活の中で、私たちは、transculturality よりも、自身に固有の“culture”という幻想に固執しがちであるように思う。二つ目のエピソードで述べたような、極右思想者・排外主義者による国家或いは民族の「伝統文化」の過度な強調は、最も顕著な例であると思う。派遣研修の事前資料で Michaels (2012) が述べているように、すべての文化は混合物であり、純粹に一國に固有な文化などない。それにもかかわらず、自国の、或いは自民族の「文化」はナショナリズムの高揚にしばしば利用され、私たちは無意識にそれを自らの誇りとして受容していないだろうか。また、transculturality を忘却或いは無視の例は、私自身の日々の大学生活の中にも見出せる。私は東洋史を学んでいるが、一つの地域、一つの時代に集中することで他の地域・時代の歴史や他の学問分野をシャットアウトしてしまう危険をしばしば感じる。今回の派遣研修を通じて、transcultural な視点は以上のような現状の打開策になるものだと感じた。Transcultural という概念によって、文化相対主義的視点から「自文化の優越」といった言説に異議を唱えることや、一つの地域・時代に焦点を当てた自身の研究を他の地域・時代との関連の中で発展させることが可能になる。「食」という、それぞれの土地ならではの文化体験を入口として、普段は見失いがちな transcultural な視点の重要性について考えることができたことは、今回の派遣研修の意義の一つだったと思う。学部最後の年となるこの一年は、専門分野を深めつつ、文化を超えた視点も忘れずに、この派遣研修で踏み出した transcultural な人材としての一步をさらに進めていきたいと思う。

最後に、ハイデルベルク・ストラスブール派遣という素晴らしい機会を与えてくださった京都大学文学部、様々な「学び」を与えてくださった、カム先生、西田さんに大変感謝しています。